

(様式2-2)

## 令和2年度いじめ・不登校・暴力行為等の未然防止事業(心の交流事業) 成果報告書

### 1 指定校・指定校群 ( 三豊市立吉津小学校 )

#### 2 実施の内容

##### (1) 吉津っ子にこここあいさつ大作戦・朝のさわやかボランティア

学校再開後、6年生が「学校を明るく元気にするためにできることはないか。」と考え、全校生に呼びかけて、気持ちのよいあいさつを広げる自主的な活動を行った。具体的な取組として、あいさつ運動に自主的に参加したり、啓発ポスターを作成して校内に掲示したり、放送であいさつ名人を紹介したりした。

また、「朝のさわやかボランティア」として、登校後に玄関周辺などを自主的に清掃する活動に取り組んだ。児童の自主性に任せているが、徐々に人数も増え、誘い合って参加する姿も見られた。教師は、児童とともに活動し、取組の様子を全校生に紹介することで、活動の価値付けを行った。

##### (2) 全校アートタイム

児童の表現力・創造力を高めるとともに、学年をこえて互いに協力したり認め合ったりする場として、朝の活動に「全校アートタイム」を設定し、表現・創作・鑑賞活動に取り組んだ。

月	活 動 内 容
7月	「オリジナルエルマーをつくろう」(低)「日本地図をアートしよう」(中)「漢字の飾りつけをしよう」(高)
10月	「葉っぱをアートしよう」(異学年縦割りチーム)
12月	作品鑑賞タイム(全校)

児童は、作品づくりに取り組むとともに、互いの作品について制作意図を紹介したり、感想を述べ合ったりした。また、作品には、児童の感想や相互に見つけ合ったよさをコメントとして一緒に掲示した。12月に実施した作品鑑賞タイムでは、学年単位で各教室を回り、他の学年の児童が創作した図工の作品を見る機会を設定した。

教師は、活動の支援者として、創作活動に必要な材料を準備したり、できあがった作品を展示したりした。

今後は、感謝や歓迎の言葉を書いたしおり作りに取り組み、日頃お世話になっている地域、学校関係者の方や、三野町を訪れる方に提供する活動を行う予定である。

##### (3) 全校チャレンジ大会

全校児童が同じ競技で記録に挑戦し、チャレンジ精神を発揮するとともに、友だちと楽しい時間を共有し、交流を深めたり、相互に讃え合ったりする場として「全校チャレンジ大会」(紙飛行機大会、ぞうきん絞り大会、豆つまみ大会、〇×クイズ大会など)を実施した。企画や運営は児童会や各委員会が行い、教師は支援に当たるとともに、挑戦者としても参加した。

##### (4) 図工作品で異学年交流「ドロリー星人が吉津にやってきた」

6年生が図工の時間に液体粘土で制作した「ドロリー星人」を校舎・校庭内に展示し、全校生がスタンプラリーをしながら自由に鑑賞し、交流する活動を行った。まず、6年生から全校生に「ドロリー星人」の展示について周知し、星人の名前や展示場所を書いたカードを配布した。作品の展示場所では、6年生が自分の作成した「ドロリー星人」の特徴等を記した説明書とともに、下級生に紹介を行った。教師は、安全面に配慮しながらスタンプラリーの様子を見守ったり、交流が円滑に進むように支援を行ったりした。

### 3 成果

#### (1) アンケート結果の変遷

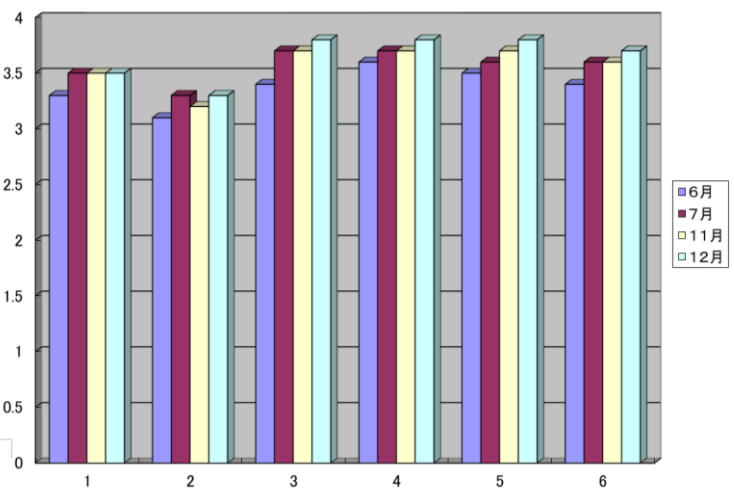
アンケート結果を見ると、すべての質問項目で、平均値の向上が見られる。児童の思いや願いを核として、共有し、協働できる場を適切に設定することで、児童が生き生きと取り組む原動力となっていると思われる。

また、項目3・4の平均値が向上していることから、児童にとっての学級は、やってみたいことが挑戦できる、協力して取り組むことができる居場所となっていることが分かる。

項目5・6の平均値も向上しており、困りのかかわりの中で感謝された充実感が自分の価値を周囲に役立たせたい思いや意欲につながっていると考えられる。

課題として、項目1・2については、若干の向上が見られるものの、そんなに高くはないことがあげられる。「自分は誰かの役に立っている。自分には〇〇なよいところがあり、そんな自分が好きだ。」と胸をはって言えるように、自己有用感を感じる活動を工夫し、自尊感情を高めていきたい。

R2年度 心の交流事業アンケートの結果



番号	質問項目
1	私には良いところがあると思う。
2	私は、自分のことが好きだ。
3	私のクラスはやってみたいことに挑戦できる。
4	私のクラスは、いろいろと協力して取り組んでる。
5	私は、周りの人の役に立ちたいと思う。
6	私は、周りの人から感謝されたことがある。

#### (2) 自発的・自治的な交流活動における子どもの様子

##### ○ 全校アートタイム「葉っぱをアートしよう」



<色合いを考えて木の葉を制作>



<上級生が下級生にアドバイス>



<色別チームで制作したアート>

この活動は、絵の具やクレヨンなどを使っていろいろな表現技法で木の葉の下地を作り、各自の作品（木の葉）を持ち寄って、一つのアート（樹木）を完成させるものである。異学年縦割りチームで創作活動を行い、表現方法や技法等を紹介し合ったりアドバイスし合ったりすることを通して、いろいろな見方や感じ方があることに気づかせるとともに、それを融合してできる作品の魅力にも目を向けさせることをねらいとしている。また、創作の過程を通して思った感想や友だちの作品から感じたことなどをカードに書いて、一緒に展示した。12月の作品鑑賞タイムには、完成したアートを見て、自分の創作した木の葉が作品の一部として位置付いていることを確認したり、感想を読み合ったりする姿が見られた。

#### (3) 総括

- 今回の取組では、特に6年生の存在が大きく感じられた。最上級生として、学校全体を視野に入れ、自分ができることは何か、下級生にどのように働きかけていくとよいかを考え実践していくこと、その成果を手ごたえとして実感していくことは、何より自己有用感を高めることに直結している。そのためには、教師が、児童一人では少し難しいが協力すればできることに取り組む

機会を仕掛けていく必要がある。また、取組の成果を価値づけ、児童に返していくこと、下級生に引き継ぎ、全体に広げていくことも大切である。その際、企画や運営は児童主体となるように任せながら、教師は安全面や生徒指導面等での支援に努めたい。

- 今回の取組では、図工の創作活動における異学年交流の場を設定したが、協力して一つのものを創りあげる中で、全体の中での自分の位置づけを知ったり、他者との調和や調整を考えたりする場となった。また、全校での鑑賞活動は、具体的な作品を通して、発想や表現のよさを学び合ったり、いつかこんな作品を作りたいと将来への展望をもったりできるよい機会となった。新型コロナウイルス感染症対策のため、直接の交流が難しい面もあるが、形態を工夫し、つながりを感じられる機会を増やしていきたいと考える。
- 自発的・自治的な交流活動を行う際、重要な要素の一つとして、「自己決定ができること」があげられる。自己決定したことが周囲にどのような影響をもたらしたかを考え、受け止めることは、自分の価値を模索すること、自己有用感を高めることにつながっていく。そのためには、日常の教育活動の中で、自己決定をする場（自分との対話）を効果的に経験させること、また、自己決定の過程では、友だちや教師の傾聴、受容、共感の場を確保することが必要だと考える。